

論文の要約

報告番号	① 乙	第 1322 号	氏名	高川 由利子
学位論文題目	Improved exercise capacity after cardiac rehabilitation is associated with reduced visceral fat in patients with chronic heart failure			
論文の要約				
※「目的・問題提起・考察・まとめ」のように論文の構成に沿ったかたちでまとめられたもので、論文の中身が分かるもの				
【研究題目】				
慢性心不全患者における心臓リハビリテーション後の運動耐容能改善は内臓脂肪減少と関連している				
【目的】 心臓リハビリテーション（心リハ）は慢性心不全患者において、死亡率を低下させ運動耐容能や QOL を改善することが示されている。運動耐容能低下は骨格筋減少や内臓脂肪増加につながる事が知られているが、慢性心不全患者において心リハの内臓・皮下脂肪や骨格筋量に与える影響は明らかではない。我々は慢性心不全患者における心リハの内臓・皮下脂肪、骨格筋量への影響を検証した。				
【方法】 New York Heart Association (NYHA) 分類 II/III の安定した慢性心不全患者 19 症例を登録し、5 ヶ月間の心リハプログラムを行いその前後で体重測定を行い、内臓脂肪・皮下脂肪面積、骨格筋量を含む体組成をインピーダンス法にて測定した。また運動耐容能は心肺運動負荷試験による最大酸素摂取量にて評価し、心機能は心臓超音波にて評価した。心リハプログラムは、心肺運動負荷試験に基づいた運動処方によって監視型運動（5 分のウォーミングアップ、30 分の自転車エルゴメータ、10 分の整理運動、5 分のクールダウン）を週 1-3 回および少なくとも週 2 回の自宅運動を行うプログラムである。対象患者は、平均年齢 59 ± 11 歳で、平均 Body mass index は、26 ± 3.3 kg/m ² で基礎疾患は虚血性心疾患が最も多かった。				
【結果】 心リハプログラムにより、最大酸素摂取量が有意に増加し、運動耐容能の改善効果が見られ、NYHA クラスが有意に改善した。また骨格筋量は変化がみられなかったが、内臓脂肪面積および皮下脂肪面積が有意に減少し体重減少がみられた。心臓超音波で評価した左室駆出率や拡張機能の指標である E/e' は変化が認められなかった。心リハによる内臓脂肪の減少は最大酸素摂取量の増加と相関関係が認められたが、皮下脂肪や体重の減少と、酸素摂取量の増加とは関連が認められなかった。				
【結論】				
慢性心不全患者に対する心リハプログラムは、運動耐容能を改善するだけでなく、骨格筋量を減少させずに内臓・皮下脂肪を減少させる効果があることが明らかとなった。				